

学部生のときは数学が生活の中心だったが、院生になると何をしてもいいのかわからず、何もできなくなった。みんなの視線も冷たく感じられた。あわてて書いた修士論文は、あせりばかりが目立っていた。

先生は退官されるので、研究室のかたづけをされている。最後の挨拶にいくべきだと思った。いつも気づまりなコーヒーをセミナーのあとに飲んだ部屋だった。無口な先生はほとんど話しをされないの、沈黙が息苦しい。しかし最後になって、先生はぼそっと小さな声で一言だけいったのだ。

「君はおもしろい」

ぼくは、ずっとつかえていたものがおりるような気持ちで院生室にもどった。ほどなく、中庭に咲く桜の樹の下を通りながら大学を去られる先生の姿をみた。